

観測部月報

★

東亞天文協會

★流星課だより (89)

小 槇 孝 二 郎

三月も二月と同様流星の少い月である。主な流星群として發表されてゐるものに下の如きものがあるが、果してその出現が期待出来るかどうかわからない。

活動期	赤 經	赤 緯	附近の星	性質
1日～4日	166	+ 5	獅子 α	緩
上 旬	116	+47	山猫 26	
15 日 頃	230	+54	龍 ϵ	速
18 日 頃	316	+78	セフェ β	緩
下 旬	161	+57	大熊 β	速

本會流星課に於て1930年以來三月中に認めた輻射點中主要なものを列挙すると次の通りである。精度は概して劣るが、其の検出を希望する。

Curr. No.	年	日時 (U. T.)	赤經	赤緯	流星數	附近の星
210	1930	三月 10.82	248	+21	5	ヘルクレス β
1049	1931	22.75	238	+14	4	蛇
1050	"	"	212	+10	5	牧 夫
1051	"	23.50	154	+17.5	4	獅子 γ
1246	1933	28.78	193	- 3	8	
1566	1936	19.54	181	+27	6	蟹
1567	"	21.75	274	+41	4	大熊 μ
		x	x	x	x	x

前號に報じた通り昨年の獅子座流星群は意外にも盛であつたのであるが、これは歐洲方面にも豊富であつた様である。

一月上旬の四分儀の観測は未だ報告の到着がないが、自分は當時津山市に滞在中で廣島縣竹原の吉井氏との間に同時観測を豫定してゐたが連日の雪降りで失敗に歸した。

昨年七月→十月までの観測集計は次表の通りである。

觀測者	觀測地	七 月			八 月			九 月			十 月		
		回数	時間數	流星數	回数	時間數	流星數	回数	時間數	流星數	回数	時間數	流星數
小横孝二郎	金 屋	2	100	34	3	215	46	1	60	19	2	40	12
吉井 耕一	廣 島 縣 竹 原	6	295	62	6	230	38	3	240	31	10	2085	526
堀田 泰生	横 濱	1	120	12	1	120	17				1	60	20
島崎 光治	石川縣大聖寺	1	46	3	2	138	21				5	189	56
坂上 務	鹿 兒 島 市	1	40	2	2	110	28				2	128	26
實方 雅雄	京 城	1	145	27									
松橋高四郎	東 京				2	115	13				1	60	1
西尾 利夫	大 阪				1	27	5						

1 29, 1939

★太 陽 課 (1939年1月)

報告者 13名(前月と同じ)であつたが、異色のあるものとしては、すばる會即ち横濱在住の淺井、森久保兩氏が各個では多忙の爲に缺測日が多くなるから共同で報告されたものである。だから實際は14名が従事した事になる。此の種の試みは、仕事の關係で連日の觀測が一人では出来ない場合には、面白い試みである。たゞ然し、其のメンバーの異動は避けねばなら無い。當課の最古の觀測者たる水澤の千葉氏の報告は大變に嬉しかつた。今後の永續を望む。

天候 元旦早々の缺測が少し遺憾であつたが、他は補へた。鹿兒島の坂上、静岡の大石、東京の阿部3氏の觀測日數が多かつた事は、努力にも依るが、表日本冬季の天候をも代辨して居る。且つシーイングの良し事も注意すべきである。其れに引きかへ、木邊、正村氏等の内陸日本はシーイングが悪く、天候も佳良では無かつた。最も御氣の毒なのは裏日本系の島崎氏である。北陸の降雪は本當に執拗そのものである。雪は已んでも容易に晴れない。然し春先を大いに期待する。水澤氏も良く似たものである。千葉氏の健闘を謝す。

概況 個人的には出入りがあるが、僅か先月よりも相對數は減少した様である。目下二月前半も、活動はさして顯著では無い。

肉眼的黑點	坂上	津留	正村	合計(坂上氏を除く)
觀 測 日	19	19	16	35
出 現 日 數	?	11	9	20
黑 點 群 數	?	5	3	5

太陽課 黒點相對數報告 (1939年1月)

觀測者(觀測地)	千葉 武志(岩手縣水澤町)	阿部 正明(東京市池袋)	御供 印孝(東京市立一中)	堀田 泰生(横濱市鶴見區)	すばる會(横濱市)	杳掛 七二(長野縣青木村)	大石 辰次(靜岡縣吉永村)	鳥崎 光治(石川縣大聖寺町)	山田 達雄(愛知縣犬山町)	正村 一忠(岐阜市藩旗町)	木邊 成磨(滋賀縣中里村)	織田 太郎(大阪市明星商業)	野村 秋馬(和歌山市南田邊)	草場 修(廣島縣瀬戸村)	津留 繁雄(熊本市本莊町)	坂上 務(鹿兒島市山下町)
口徑 mm	102	130	100	60	76	75	25	35 69	75	55	102	50	38	50	32	50
倍率	67	45	45	52	75	60	48	44 87	64	64	75	50	50	32	45	50
1	曇	曇	報	多	曇	曇	曇	報	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
2	69	59	報	多	46	37	45	報	38	40	42	53	53	曇	曇	曇
3	72	雨	報	多	曇	曇	雨	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
4	75	雪	報	多	95	73	73	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
5	79	雪	報	多	95	73	73	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
6	102	89	報	多	99	95	58	曇	50	52	61	79	103	76	76	76
7	曇	曇	報	多	曇	114	69	告	雪	73	90	94	111	88	88	88
8	106	曇	告	忙	曇	曇	45	告	曇	94	67	85	85	曇	曇	曇
9	105	曇	告	忙	100	123	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
10	曇	曇	告	忙	158	134	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
11	曇	曇	告	忙	曇	137	97	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
12	156	曇	告	忙	142	83	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
13	曇	曇	告	忙	曇	128	73	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
14	142	曇	告	忙	106	134	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
15	154	曇	告	忙	104	134	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
16	曇	曇	告	忙	88	104	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
17	曇	曇	告	忙	曇	72	雨	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
18	104	曇	告	忙	曇	雨	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
19	89	曇	告	忙	曇	曇	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
20	91	曇	告	忙	曇	曇	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
21	曇	曇	告	忙	98	105	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
22	曇	曇	告	忙	曇	131	57	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
23	113	曇	告	忙	曇	107	70	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
24	133	曇	告	忙	曇	64	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
25	雨	雨	告	忙	曇	曇	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
26	171	曇	告	忙	124	曇	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
27	144	曇	告	忙	106	曇	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
28	136	曇	告	忙	曇	曇	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
29	125	曇	告	忙	曇	曇	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
30	雨	曇	告	忙	曇	曇	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
31	曇	曇	告	忙	曇	曇	曇	告	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇	曇
觀測 日數	19	15			12	16	16		6	21	20	16	14	11	24	15
一日 平均	115	86			106	102	57				78	96	103	103	67	90
前月 平均	118	105	101	101	—	101	62		61	74	106	—	164	94	94	—

(註) すばる會は横濱の淺井，森久保兩氏

黒點群累計数 ? 12 11 23

観測者2名では心淋しく、不充分であるが、平均した観測日と出現日数の比は0.57であつて、相當多い方である。然し、稀有と云つた大黒點は出現しなかつた事も確かである。黒點の小さい割に、比が大きいのは多分観測者が馴れて來た事にも依るのだらう。月々5名位の報告者が欲しい。

南北兩半球の比較	津留	織田	木邊	島崎	沓掛
南	53.0	56.9	63.0	(39.5)	64.4
北	33.2	48.6	38.5	(14.0)	31.7

南北の比は（島崎氏は観測日数としては不充分であるが、加算した）南1.00に對して北0.60であつて、先月以上に南に偏した。多分最も確度の高いと思はれる沓掛氏の値からして云へば南半球に2倍出現したさへ云へる。（坂上氏より南に著しく偏したとのみ報告あり）

各個の黒點群の緯度では $\pm 30^\circ$ 以上又は 5° 以下の極端なものは出現しなかつた様である（沓掛、津留氏）。

其他 津留氏よりスケッチ、島崎氏より一口分の太陽全面のスケッチ、沓掛氏より各群の緯度の報告を受けた。

訂正 天界214號相對數表中津留氏の分8日89は曇りに訂正。

同

阿部氏8日134、13日138、14日145と追加の報告あり（表には曇と記入）、従つて観測日数は15日、一日平均相對數は94に訂正。

★變光星課（1938年12月、1939年1月）

1938年12月の概報

12月報告者と目測數

氏名	西川英男	小澤喜一	山田達雄	坂上務	島崎光治	清水直次	大田彬	坂部	木邊成磨	合計九名
観測星數	1	25	7	1	2	4	2	3	39	59
目測數	3	219	29	2	5	21	7	22	374	682

内譯第二部

小澤	木邊	合計
25	31	36
219	352	571

第一 部 (以下光度は數字だけで示す)

長週期星類 増光中 U Ori 8.8~8.3 (清水 1, 太田 2, 木邊 4).

極大附近 (又は變化僅少) T Cet 6.6~6.7 (清水 7, 山田 4), W Cyg 6.0± (山田 10).

減光中 R And 7.0~7.2 (山田 4), o Cet 6.7~7.3 (山田 5, 清水 7, 坂部 2), S CMi 7.7~8.2? (坂上 2, 島崎 2), R. Tri 7.6~8.3 (清水 6, 山田 1), R Peg (山田 3).

其他 γ Cas ヤヤ暗し 2.6± (木邊 3), R CrB 小さい 13.0 (木邊, 12月31日), α Ori 暗し 1.1 (西川 3), 1.0± (木邊 4), δ Cep (清水 12), V 356 Aql DQ Her, CP Lac, BL Ori (以上木邊), R Sct (山田).

第二 部

2 Max CY Lyr, BI Ori, CZ Ori, TZ Per, SU UMa.

1 Max UU Aql 12日~18日 long Max, SS Aur 22日 Max, FO Afl Z Cam, X Leo, AY Lyr, CN Ori.

RX And 停留中, 其他の SS Cyg 型 Max なし. (以上小澤, 木邊)

RR Tau 12.8~12.0 稍復光. (小澤)

1938年度の報告累計數を示すと下記の様になる. 稍一部の人に偏して居る傾向がある. 一般觀測者の奮起を望む. (1937年11月~1938年10月)

觀 測 者	小 山	今 津	杳 掛	西 井	西 川	廣 瀬	實 方	小 澤	松 橋	草 場	笹 部	坂 上	山 田	島 崎	三 宅	森 久 保	吉 池	清 水	木 邊	合 計
報告月數	10	3	7	6	11	10	3	12	2	2	1	6	4	6	6	1	3	4	12	20名
目測數	188	35	149	169	77	660	62	1911	19	39	22	68	87	109	183	13	52	76	2653	7928

(以上木邊)

報告 近く1937, 1938兩年度の當課員の觀測報告を中心にして, 變光星課報告第二號を發表したく思つて居る. 其の爲めに目下, 調査を開始して居る. 故小山課長の遺業を全じ度いと思つて居るが, 何分前回以上の大量になるらしいから, 凡ゆる方面での援助を切望する.

猶ほ今月より更に當課の幹事を一名増加して, 小澤喜一氏に就任していたゞいた.

★彗星課だより

昨1938年は、彗星界に誠に淋しくて、其の年中にゲール彗星只一つしか発見されなかつたといふ有様であつた。ところが、今年は

キネケ星	(週期 6.090年	1939年 6月23日近日點通過の豫想)
コブ星	(〃 6.556年	〃 3月12日 〃)
ボレリ星	(〃 6.974年	〃 6月29日 〃)
ブルクス星	(〃 6.949年	〃 9月15日 〃)
タトル星	(〃 13.606年	〃 11月10日 〃)
第二ツルフ星	(〃 6.790年	〃 10月1日 〃)

等の週期彗星が再歸する筈であるし、尙ほ、

ジャコビニ・チンナ星	(週期 6.588年	1940年 2月17日近日點再歸の豫想)
フィンレイ星	(〃 6.819年	〃 4月20日 〃)
フエ星	(〃 7.416年	〃 4月23日 〃)

の星々も此の1939年内に其の姿を現はすだろうと豫想され、彗星は大に賑やからしいが、早くも此の1月に上記以外の新彗星が発見された!

この新彗星は去る1月20日に米國オハヨ州にゐる老練家 Peltier 氏が白鳥座の東南端に8等級の星として発見したものであるが、其の後、間もなく此の星は其れより3日前、即ち1月17日に中央アジアのタシケント天文臺の Cosik が発見し、同19日にはブルコワ天文臺で首尾よく観測された。従つて此の星は二人の発見者の名を列ねてコジク・ベルテヤ彗星と呼ばれることとなつた。

此の星の軌道は、デンマルク國 Möller 氏の計算によると、

近日點通過	1939年2月6.787 (U. T.)	近日點引數	168°54' 52"	} 分點 1939.0
〃 距離	0.71667 單位	昇交點	288 48 50	
		傾斜	63 28 32	

それで、2月中頃は一時非常に明るく、肉眼にも見えるやうになつたが、3月にはズツと南天へ行つて了つて、日本内地から全く見えないものとなる筈である。(山本)

★遊星面課

常課の最もマクして居る火星の接近も、間近かに迫つて來た。四月頃から観測開始の豫定である。本年度から課長には伊達英太郎氏(兵庫縣川邊郡雲雀ヶ丘)が就任され、常課の観測相談、報告等、すべて同氏が世話される事となつた。次號から火星表を掲載する豫定である。(幹事 木邊記)